琉球大学学術リポジトリ

# 中学生における「生きる力」の心理学的検討　(1)
## ～CAMI理論を中心として～


| メタデータ | 言語:<br>出版者: 琉球大学教育学部<br>公開日: 2010-04-22<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 千葉, 康成, 島袋, 恒男, Chiba, Yasunari, Shimabukuro, Tsuneo<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/16529 |

# 中学生における「生きる力」の心理学的検討1
## ～CAMI理論を中心として～

千葉康成*，島袋恒男**

A psychological study on "The zest of living" of
a junior high school student 1
～ an analysis of CAMI scales ～

Chiba yasunari, Shimabukuro tsuneo

## I　背景と目的

### 1．生きる力

#### 1.1．新しい学習指導要領

文部科学省では，平成20年1月17日の中央教育審議会答申（以下，中教審答申）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を受け，学習指導要領改訂の作業を進め，平成20年2月，幼稚園教育要領，小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領の改訂案を公表した。平成21年度からの移行措置を経て，小学校では平成23年度から，中学校では平成24年度から完全実施する予定である。この中教審答申には，「現行学習指導要領の理念である『生きる力』をはぐくむこと，この理念は新しい学習指導要領に引き継がれます。」と謳われている。そして，改めて「生きる力」とは，

○基礎・基本を確実に身に付け，いかに社会が変化しようと，自ら課題を見つけ，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力

○自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性

○たくましく生きるための健康や体力などとしている。

今回の改訂では，教育基本法や学校教育法の改正などを踏まえ，「生きる力」をはぐくむという学習指導要領の理念を実現するため，その具体的な手立てを確立することを目指すという。

果たして，今現在の中学生には，どれほどの「生きる力」が身についているのだろうか。実態を把握せずして学習指導要領が改訂されても，子どもたちに「生きる力」が身につくとは考えにくい。どのようにして把握すればよいだろうか。

#### 1.2．「生きる力」の理念

この「生きる力」という言葉が，教育改革のキーワードとして最初に登場するのは，第15期中央教育審議会第1次答申（1996年7月）においてである。本答申の副題は，「子供に『生きる力』と『ゆとり』を」であり，本答申の中で初めて「生きる力」という言葉が示され，教育界で公認された。答申は，これからの子どもに求められる資質や能力を「変化の激しい社会を生き抜く力」であると規定した上で，「生きる力」を，知，徳，体の三つのレベルで説明している。

①「自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」

②「自らを律しつつ，他人とともに協調し，他

* 名護市立羽地中学校（Haneji junior high school, Nago city）
** 琉球大学教育学部（College of education, University of the Ryukyus）

人を思いやる心や感動する心など，豊かな人間性」

③「たくましく生きるための健康や体力」

高橋（2007）は，ここでは，将来予測が不可能で，何が起きるか分からない変動の激しい社会に投げ出されても，自分で課題に取り組み，自分で解決しながら，自立して生きていけるたくましい人間の姿が描き出されている，という。この考え方は，社会の未来像を明確な形では提示できず，これさえ獲得すれば義務教育として十分という知識内容の水準すら確定しにくくなった時代の能力観の反映と言える。頼れるのは，既存の学問や知識体系ではなく，自分が試行錯誤して身に付けてきた「問題解決の力」だけなのだという暗黙の，しかし厳しいメッセージがひしひしと伝わってくる，と高橋（2007）はいう。

さらに高橋（2007）は，こう見てくれば，「生きる力」は，よく誤解されるように「ゆとり教育」の産物などとは到底言えない出自のものであることは明らかであるという。ますますグローバル化する社会の中で，一人ひとりの人間はどう生きていけばよいのかという厳しい社会的現実に直面した言葉であると述べている。

結びに高橋（2007）はこう主張する。人間形成においては，子どもの自立意識と共生感覚の育成は，相即不離なものとして考えられなければならない。異質な他者を排除せず，多様な他者との共生感覚に支えられた自立意識こそが，これからの「生きる力」の内実をなすものとして理解されなければならないであろう。それゆえに，「生きる力」とは，独力で生き残ろうとする「開鎖的な個人」の力を意味するのではなく，自然や他者と共に生きる「開かれた個人」の力を指すものとして理解していくことが大切である。

### 1.3.「生きる力」の自己評価

そこで，Benesse 教育研究開発センター（2002）より公表されている報告書「21世紀型学力を育む総合的な学習を創る-新しい学力を育む教育調査」の第２章－１「新しい学力を育むための教育調査」では，児童・生徒の学力を捉えるために，教科学力テストのみならず「生きる力」自己評価をアンケートの中で実施している。調査時期は2001年５月～６月，調査対象は東北・関東・近畿・中国・九州の公立小学校19校の小学５年生（児童数1618名），公立中学校15校の中学２年生（生徒数2313名）である。

これは，「新しい学力を育む」研究会により作成（監修は田中博之（当時，大阪教育大学助教授））され，実施後の分析において，「生きる力」領域と評価項目の再整理を行っている。40の質問項目について因子分析を行い，「生きる力」領域を検証している。この結果をもとに４つの領域と８つの中領域が再設定されている。

①「能力・スキル」領域

IT 技能・情報モラル項目を中心とした「情報活用力」領域。また，他の項目については，「調査研究力」と「コミュニケーション力」に二分した。

②「社会への適応力」領域

③「態度・価値観」領域

因子分析の結果，「共生的態度」と「自律的態度」の２つの中領域を設定。

④「自己成長力」領域

因子分析の結果より，「自己認識力」と「生き方の構想力」の２つの中領域を設定。

今回の研究で，中学生の「生きる力」の現状を把握するために，調査に利用したいと考えている。

### 1.4. 脳科学における「生きる力」

近頃の脳科学の発展は著しい。その中でも，「社会脳」や「SQ（社会的知性）」という新しいキーワードが聞こえるようになってきた。

岡田（2007）は，著書「社会脳」にて，パーソナリティー（人格）の根底にあるもの，それが社会脳だという。20年以上前から，学校や子どもたちの世界だけでなく，企業や大人の社会においても，社会的な能力の低下が進行していることが再三指摘されてきた。近年の研究，特にこの10年ほど，急速な勃興を遂げたソーシャル・ニューロサイエンス（社会神経科学）は，社会性というものを脳の活動レベルで解明し始めている。社会性の能力が，知的能力以上に，人生の幸福度や社会的成功を左右していることが明らかとなってきたという。社会性の能力が育っていないと学力さえ身につかないという。

このように，脳科学の領域から，「生きる力」の根底が「社会的な能力」であるといえそうだ。

## 2．沖縄県における教育問題

一方で現実として，「生きる力」が身についていれば起こりそうもない問題が，沖縄県には山積みのようだ。子どもたちを取り巻く問題は多岐にわたり，後を絶たない。沖縄県においては，以下の問題が深刻なものとしてあげられる。

### 2．1．「100の指標からみた沖縄県のすがた」

沖縄県企画部統計課（2007.10）によって発表された「100の指標からみた沖縄県のすがた」によると，完全失業率の高さは全国一，進学率は高校，大学ともに全国最下位，新規学卒者の無業者比率は高校，大学ともに最悪で，雇用情勢の厳しさを裏付けている。新規高卒者の就職率はワースト2，離職率は全国5位の高さだった。開業率，廃業率がともに全国一高いのも特徴的だ。県民所得は全国最下位，負債年収比率は全国一である。多くの県内世帯で家計は「火の車」状態か。出生率は全国一だが，離婚率も全国一だ。年少（0～14歳）人口割合が全国一高いこともあわせると，沖縄には例えば，所得が低く生活するのがやっとの母子家庭が多いということが考えられる。子どもたちだけを残して夜働きに出る保護者も多いのだろう。このように，沖縄県は社会的な問題も多く抱えていることがわかる。

### 2．2．　平成19年度　全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）全教科で最下位

文部科学省は，2007年4月24日に小学6年と中学3年の全児童・生徒を対象に実施した「全国学力テスト」の結果を発表した。沖縄県の公立校の平均正答率は，国語，算数・数学の各教科で全国平均を約5～15ポイント下回り，すべての教科で全国最低の数値だった。翌日の琉球新報朝刊で仲村守和県教育長は結果の要因について「授業の形態や方法，生活習慣などいろいろな要素がある」を述べ，多くの設問で無回答率が全国の2倍近い数値であることも指摘した。また，生活と学力が密接に関連していることも明らかになり，沖縄県は他県に比べて基本的な生活習慣が身についていないことも明らかになった。

### 2．3．　高等学校中途退学者

沖縄県の高等学校の中途退学者について，文部科学省の報道「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると，平成17年度は中途退学者数1,069人で，中途退学率は2.0%（全国2.1%）で，平成18年度は中途退学者数1,081人で，中途退学率は2.1%（全国2.2%）だった。高校入学者の50人に1人が中途退学している計算になる。

その主な理由としては，「学校生活・学業不適応」が最も高く，中途退学者の38.9%がその理由とし，中でも，「もともと高校生活に熱意がない」が14.9%，「人間関係がうまく保てない」が7.5%となっている。次に多いのが「進路変更」による中途退学で，33.4%をしめる。その中でも「就職を希望」するものが15.0%，「別の高校への入学を希望」するものが9.9%いる。

### 2．4．高校生の就職，進学

平成19年度　学校基本調査　【卒業後の状況調査】（沖縄県教育委員会）によると，高校卒業後の大学等への進学者は5,378人で平成18年度から308人減少，進学率も0.1ポイント減少し33.5%となった（全国は51.2%で沖縄県最下位）。就職者総数は，2,883人で平成18年度から178人増加，就職率は平成18年度から2.0ポイント上昇し18.0%となった（全国は18.5%で，沖縄県は15番目に少ない）。

### 2．5．若年無業者（NEET:Not in Education, Employment or Training）の統計

週刊ダイヤモンド（2007.4.14）には，「ニート率ランキング」という記事があり，都道府県別，各市区別に，2005年実施の国勢調査よりニート人口を割り出している。これによると，人口1000人当たりの「ニート率」の全国平均は3.05人。それに対し，都道府県別では沖縄県は5.19人と断然高い。また，市区別でも沖縄県の名護市が18.28人でトップであった。

今の子どもたちの就職に関する意識，進学に関する意識はどうなっているのだろうか。また，自

分の将来の目標達成に向けての意識や認識はどうなっているのだろうか。

## 3．CAMI 理論と効力期待

### 3.1．CAMI 理論

ところで，CAMI 理論を用いて沖縄県内の児童生徒の目標達成に向けての意識や認識の特徴を分析した島袋ら（1996）によれば，「勉強のできる子」と「勉強のできない子」の両者の多くの者は，勉強ができる，できないことの原因を，「能力」と「運」という認識を土台として，成績・勉強に関する自己理解をしているのであると説明できると言う。それとは反対に「努力」＝「行動」次第という説明は相対的に弱いことを指摘している。進路や学習の達成において，児童・生徒本人が自らコントロールできない「能力」や「運」の役割が強調され，反対に「努力」や「行動」の役割の理解や意識が弱いということは，沖縄県の児童・生徒の多くの者は，進路決定や学習場面において「自律的・主体的」ではなく，「他力本願的」であることを予測させている。というのは人が自分の意志でコントロールできるのは「能力」や「運」ではなく，自らの行動，すなわち「努力」であると考えられるからである。児童・生徒が「自律的・主体的」であるということは，進路選択場面や学習場面において，「私→行動→結果（目的）」という流れの中で，自分の行動（手段）と結果（目的）のつながりを理解し，学習や進路における「見とおし」を持つことを意味する事になる。しかし，現実はそれとは反対の「他力本願的」な傾向が垣間見える。

このCAMI 理論は，Skinner ら（1988,1993）によって開発された。Skinner ら（1988,1993）は，人の目的指向的行動には，行為者，目標，手段という３つの側面が含まれると考え，行動の予測には行為者と目標の関係（統制感：Control Beliefs），行為者と手段の関係（手段保有感：Agency Beliefs），手段と目標の関係（手段の認識：Means-ends Beliefs）の３つの側面を理解することの重要性を指摘した。このようにCAMIとは，自己の目的達成に関する目的達成への統制感（Control Beliefs），そして手段保有感（Agency Beliefs）手段-目的関係の一般的認知（Means-ends Beliefs）の頭文字に Interview のIを加えた略称である。統制感は，目的達成への自信や無力感に関係しており，目的的行動の遂行を直接的に決定する側面と言える。そして，この統制感のあり方を決定していると思われるのが，手段の保有感であり，目的達成に向けての手段（努力，能力，運，他者の援助）がどれだけ自分に備わっているかという側面である。そして，手段保有感のあり方を方向づけると思われるのが，手段-目的関係の一般的認知（以下，手段の認識）であり，手段として努力，能力，運，他者の援助，未知の原因が想定される。

このように，島袋ら（1996）の研究結果から，沖縄県の児童生徒は「自ら課題を見つけ，主体的に判断し，行動し・・・」という力，すなわち「生きる力」が弱いのではないか。先行研究では，「学習」，「進路（キャリア）」「対人関係（社会性）」における CAMI が開発されており，この３つは「生きる力」に含まれると考え，調査に利用し，それぞれの関連を検討したい。これらの CAMI 尺度を利用して，「努力」や「行動」の役割の理解，意識を測りたい。

### 3.2．自己効力による動機づけ

この CAMI 尺度に関連が深いものとして，バンデュラ（Bandura,1977）の自己効力による動機づけがある。竹綱（1996）は自己効力による動機づけについて次のように述べている。

『夏休み前の終業式の日に，担任の先生が生徒に「この休み中は，毎日，必ず最低10時間は勉強しなさい。そうすれば，希望の高校へ入学できます」と言ったとしよう。さて，こう言われて，生徒の学習意欲は高まるだろうか。

行動と報酬の随伴性について，ある行動をすることによって望ましい報酬を得ることができると認知するならば，その行動が生起する確率が増加する（あるいは，その行動をするように動機づけられる）。しかしながら，毎日10時間勉強すること（行動）と希望の高校へ入学できること（報酬）に随伴性があると生徒が認知したとしても，必ずしも学習行動への動機づけは高まらないだろう。というのは，１日に10時間も勉強するなんてとてもできないと考える生徒にとって，そのような行

動と報酬の随伴性の情報はほとんど意味がないからである。このように，これまでの動機づけ理論とは異なる観点から人間の動機づけについて考察しているのが，バンデュラの自己効力理論である。』

バンデュラ（Bandura, 1977）は，効力期待と結果期待に区別し，次のように述べている。「結果期待（outcome expectation）とは，所与の行動がある結果に至るであろうという，その人の査定である。効力期待（efficacy expectation）とは，その結果を得るために必要な行動をうまく実行できるという確信である。人が，一連の行動がある結果を生むとわかっていたとしても，自分が必要とされる行動を遂行できるかどうかを疑っているならば，そのような情報（結果期待）は行動に影響しない。……知覚された効力期待は，活動や場面の選択に影響するのみならず，努力にも影響する。効力期待が高ければ高いほど，困難に直面した際によりがんばることができるのである。」そして，知覚された効力期待を自己効力（self efficacy）と名付けた。

この自己効力が，どれだけ知覚されているかを調べるための尺度として)。CAMI 尺度が活用できると考える。つまり，自分がある行動をとることができるという自信，確信をもっているかどうかを「自己統制感：Control Beliefs」でみることができ，その行動の手段（努力）をどれだけ保有しているかを「手段の保有感：Agency Beliefs」でみることができる。

## ４．研究の目的

これまでの背景をまとめれば，日頃の学校生活において，名護市の中学生は保護者や地域の人々，教職員と共に「生きる力」を身に付けるために日々精進しているだろうが，現状としては，「生きる力が身についている」と言い切るにはほど遠い状況がある。では，どの程度の「生きる力」を有しているのか，そもそも「生きる力」とは心理学的にどのように理解されるのかという検討を進めていくのが本研究の主目的である。具体的には，以下の２つの目的で本研究を進めていくことにする。

⑴ 名護市の都市部，農村部における中学生の「努力」や「行動」の役割の理解や意識を，対人関係，学習，進路の３つの CAMI 理論を中心に活用して明らかにする。さらにデモグラフィック要因との関連も分析する。

⑵ ３つの CAMI の関係を見いだし，それとベネッセの「生きる力（自己評価)」が，どう関連しているかを検討し，発達的にも分析する。

⑶ 生きる力と学力の関係を明らかにする。

## ５．研究計画と方法

３つの CAMI 測定尺度の関係と，生きる力（自己評価）や学力との関係

［目　的］名護市の都市部，農村部における中学生の「努力」や「行動」の役割の理解や意識を，対人関係，学習，進路の３つの CAMI 理論を中心に活用して明らかにし，この３つの CAMI とベネッセの「生きる力（自己評価)」がどう関連しているかを検討する。

［方　法］

調査対象者：名護市内の中学生（都市部，農村部）１，２，３年１年約300名，２年約300名，３年約300名

調査内容：１，３年　学習，対人関係，進路 CAMI 測定尺度　60項目　４件法（統制感４項目，手段の保有感16項目の計20項目×３＝60項目）生きる力（自己評価）ベネッセ調査　40項目　４件法　教育指標デモグラフィック要因（学校所在地，学年，性，親の出身地，親との同居，兄姉の有無，部活動への参加，勉強時間，読書時間，TV 時間などの親との約束ごと，将来の夢の有無，卒業後の希望進路，県外就職希望）等

調査時期：2008/02

［分析１］３つの CAMI 尺度を個別に因子分析し，因子得点を算出する。因子得点を用いて，学年別，性別，都市部・農村部などで平均を比較をする（t検定，F検定)。デモグラフィック要因（生活習慣など）との関連も検討する（F検定，t検定)。さらに，その因子得点

を２次的に因子分析し，３つの尺度がどのようにまとまるのかを検討する。

［分析２］分析１の３つのCAMI尺度の２次的因子得点と，「生きる力（自己評価）」の各項目の平均得点との関連を検討し（相関），その因子得点が「生きる力」へ与える影響を検討する。さらに，学年別，性別，都市部・農村部などで平均を比較をする（t検定，F検定）。デモグラフィック要因（生活習慣など）との関連も検討する（F検定，t検定）。

Table 1　被調査者の学年別・性別内訳

| | 都市部 | | | | 農村部 | | | | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 1学年 | 2学年 | 3学年 | 計 | 1学年 | 2学年 | 3学年 | 計 | |
| 男 | 103 | 107 | 113 | 323 | 61 | 55 | 68 | 184 | 507 |
| 女 | 92 | 85 | 88 | 265 | 40 | 56 | 50 | 146 | 411 |
| 不明 | 3 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| 合計 | 198 | 192 | 201 | 591 | 101 | 111 | 118 | 330 | 921 |

### ６．統計処理

本調査のデータを統計処理，データ解析する際に，「SPSS for Windows」リリース　11.5.2.1 J（4 Apr 2003）スタンダードバージョンを利用する。

## Ⅲ　結果と考察

### １．CAMI測定尺度の因子分析

学習，進路，対人関係の３つのCAMI測定尺度をそれぞれで因子分析を行った。欠損値は「平均値で置換」した。因子負荷量は絶対値が0.40以上のものを採用したが，２つ以上の因子にまたがって因子負荷量が0.40以上にならないように調整をした。

#### 1.1. 学習CAMIの因子分析

Table ２は，学習CAMIの20項目を因子分析し，固有値1以上でバリマックス回転し，その結果から因子数を４に指定し，再度バリマックス回転で因子分析をし直した結果である。

Table ２の結果から，全分散の41.85％で４因子が説明されていることがわかる。

第１因子は，固有値2.96（14.82％）の因子であり，「15:【学習 AL】もっと運がよくなると，私はもっといい成績がとれると思います」，「14:【学習 AL】私は運がよくなって学校の成績がもっとよくなると思います」，「13:【学習 AL】テストのとき私は，運がよくなってもっとよい点がとれるようになると思います」，「16:【学習 AL】今後テストでは予想がよく当たるようになり，私はうまくいくことが多くなると思います」，「8:【学習 AA】私の成績が今よりもよくなったとしたら，それは私にもともと能力があるからだと思います」，「5:【学習 AA】特にがんばらなくても，私はいつかはもっと勉強がわかるようになると思います」の６項目に高い負荷を示している。生徒が運や能力を保有しているという「運・能力の保有感」の因子であるといえる。

第２因子は，固有値2.19（10.97％）の因子である。この因子に負荷するのは，「12:【学習 AE】私がこつこつ勉強を続けていけば，いつかはテストでもっといい点がとれると思います」，「9:【学習 AE】授業中，先生の説明をよく聞けば，私はもっと成績がよくなると思います」，「11:【学習 AE】私の成績がもっとよくなったとしたら，それは私ががんばったときです」，「20:【学習 AP】勉強がわからないとき，私が先生にもっと質問するとちゃんとわかるようになると思います」の４項目である。つまり，「私が努力すれば，成績が良くなる」という「努力の保有感」の因子である。

第３因子は，固有値1.64（8.19％）の因子である。「1:【学習C】私はもっとやる気になって，今よりむずかしい勉強でもわかるようになれます」，「3:【学習C】私はテストなどでまちがいをへらそうときめたら，確実にまちがわないようになります」，「4:【学習C】私は，学校の勉強が今よりもたくさん理解できるようになれます」，「7:【学習 AA】私には，学校の成績がもっと伸びていく力が十分備わっていると思います」，「2:【学習C】私は今よりも悪い点をとらないと決めたら，絶対にとりません」の５項目が高い負荷を示している。根拠は抜きにして「私は達成できる」という「達成への統制感」の因子である。

第４因子は，固有値1.57（7.86％）の因子である。「17:【学習 AP】先生がきちんと説明してく

れると，私はもっと勉強ができるようになります」，「18:【学習 AP】先生がいろいろ助言してくれれば，私はもっといい成績がとれると思います」，「10:【学習 AE】私が先生の話をもっと注意して聞けば，今より勉強がよくわかるようになると思います」の３因子が高い負荷を示している。先生の力を借りればできるという「教師の援助の保有感」の因子である。

全体的にみて，第１因子に「運」と「能力」が重なり，自分の学習の結果を，統制不可能な運や能力で説明しようとする考えに左右されていることがわかる。しかも，「運」と「能力」が同じ因子の中に含まれており，本来ならば別の概念だが，同じように捉えている様子が伺える。この２つに共通することは，「統制不可能」ということと，「もともと」や「生まれつき」という言葉をつけ

Table 2　学習 CAMI の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

| | 因子1 運・能力の保有感 | 因子2 努力の保有感 | 因子3 達成への統制感 | 因子4 教師の援助の保有感 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|
| 15:【学習AL】もっと運がよくなると、私はもっといい成績がとれると思います。 | .677 | .086 | .069 | .148 | .492 |
| 14:【学習AL】私は運がよくなって学校の成績がもっとよくなると思います。 | .673 | .051 | .126 | .158 | .496 |
| 13:【学習AL】テストのとき私は、運がよくなってもっとよい点がとれるようになると思います。 | .639 | .089 | .187 | .191 | .487 |
| 16:【学習AL】今後テストでは予想がよく当たるようになり、私はうまくいくことが多くなると思います。 | .609 | .028 | .316 | .195 | .509 |
| 8:【学習AA】私の成績が今よりもよくなったとしたら、それは私にもともと能力があるからだと思います。 | .500 | .160 | .238 | .053 | .335 |
| 5:【学習AA】特にがんばらなくても、私はいつかはもっと勉強がわかるようになると思います。 | .479 | -.160 | .241 | .049 | .316 |
| 19:【学習AP】私が先生と仲良くなれば、もっと学校でできるようになると思います。 | .274 | .247 | .258 | .273 | .277 |
| 12:【学習AE】私がこつこつ勉強を続けていけば、いつかはテストでもっといい点がとれると思います。 | .016 | .723 | .156 | .057 | .550 |
| 9:【学習AE】授業中、先生の説明をよく聞けば、私はもっと成績がよくなると思います。 | .067 | .643 | .083 | .163 | .451 |
| 11:【学習AE】私の成績がもっとよくなったとしたら、それは私ががんばったときです。 | .030 | .597 | .077 | .125 | .379 |
| 20:【学習AP】勉強がわからないとき、私が先生にもっと質問するとちゃんとわかるようになると思います。 | -.006 | .474 | .169 | .299 | .342 |
| 1:【学習C】私はもっとやる気になって、今よりむずかしい勉強でもわかるようになれます。 | .248 | .319 | .493 | .242 | .465 |
| 3:【学習C】私はテストなどでまちがいをへらそうときめたら、確実にまちがわないようになります。 | .202 | .193 | .482 | .080 | .317 |
| 4:【学習C】私は、学校の勉強が今よりもたくさん理解できるようになれます。 | .327 | .274 | .453 | .338 | .502 |
| 7:【学習AA】私には、学校の成績がもっと伸びていく力が十分備わっていると思います。 | .342 | .289 | .424 | .268 | .452 |
| 2:【学習C】私は今よりも悪い点をとらないと決めたら、絶対にとりません。 | .323 | .124 | .412 | .157 | .314 |
| 6:【学習AA】私はわりと頭がいいので、がんばらなくてももっと勉強がわかるようになります。 | .386 | -.067 | .397 | -.028 | .312 |
| 17:【学習AP】先生がきちんと説明してくれると、私はもっと勉強ができるようになります。 | .185 | .231 | .155 | .648 | .532 |
| 18:【学習AP】先生がいろいろ助言してくれれば、私はもっといい成績がとれると思います。 | .313 | .178 | .148 | .614 | .528 |
| 10:【学習AE】私が先生の話をもっと注意して聞けば、今より勉強がよくわかるようになると思います。 | .058 | .381 | .048 | .403 | .313 |
| 固有値 | 2.96 | 2.19 | 1.64 | 1.57 | 8.369 |
| 分散の % | 14.82 | 10.97 | 8.19 | 7.86 | |
| 累積 % | 14.82 | 25.80 | 33.99 | 41.85 | |

因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

注）因子負荷量は、絶対値が0.40以上のものを採用した。

て説明できることである。次に，統制可能な努力に原因帰属する「努力の保有感」が第２因子になり，第３因子として「達成への統制感」，第４因子として「教師の援助の保有感」が表れた。島袋ら（1996）の先行研究と同様に，勉強ができる，できないことの原因を，「能力」と「運」という認識を土台として，成績・勉強に関する自己理解をしていると説明できる。それとは反対に「努力」＝「行動」次第という説明は相対的に弱いと言える。すなわち，自信が持てるほどの努力をしていないということである。

### １．２．対人関係 CAMI の因子分析

Table ３は，対人関係 CAMI の20項目を因子分析し，固有値１以上でバリマックス回転をした結果である。

Table ３　対人関係 CAMI の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

| | 因子1 達成への統制感 | 因子2 教師の援助の保有感 | 因子3 運の保有感 | 因子4 良い性格の保有感 | 因子5 努力の保有感 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1:【対人C】私は、その気になればたくさんの友達をつくれます。 | .822 | .092 | .053 | .200 | .168 | .755 |
| 2:【対人C】私は、その気になれば新しい友達とすぐ仲よくすることができます。 | .801 | .098 | -.002 | .166 | .235 | .735 |
| 6:【対人AA】私は新しい友達とすぐ仲よくなれる性格です。 | .513 | .126 | .013 | .145 | .336 | .413 |
| 3:【対人C】私は、たくさんの友達といっしょにうまく係活動をしようと思ったらそうすることができます。 | .467 | .137 | .068 | .192 | .315 | .378 |
| 18:【対人AP】もし私に友達がたくさんできたとしたら(できたのは)、それは先生のおかげです。 | .114 | .697 | .234 | .205 | .089 | .603 |
| 19:【対人AP】私が友達に好かれたとしたら、それは先生のおかげです。 | .071 | .692 | .167 | .077 | .026 | .519 |
| 20:【対人AP】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら(できたのは)、それは先生のおかげです。 | .130 | .642 | .242 | .190 | .107 | .536 |
| 17:【対人AP】もし私が新しい友達と仲よくなれたとしたら(なれたのは)それは先生のおかげです。 | .076 | .631 | .177 | .194 | .110 | .485 |
| 15:【対人AL】私にたくさん友達ができたとしたら、それは運がいいからです。 | -.002 | .087 | .639 | .032 | .072 | .422 |
| 16:【対人AL】私が新しい友達と仲よくなれたとしたら(なれたのは)、それはたまたま運がよかったからです。 | .068 | .326 | .634 | .205 | -.044 | .556 |
| 14:【対人AL】私が友達に好かれたとしたら(好かれているのは)、それはもともと運がいいからです。 | .089 | .294 | .619 | .227 | .010 | .530 |
| 13:【対人AL】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら(できたのは)、それは運がいいからです。 | -.009 | .154 | .546 | .113 | .054 | .338 |
| 7:【対人AA】私にたくさん友達ができたとしたら(できたのは)、それは私の性格がいいからです。 | .134 | .241 | .220 | .668 | .148 | .593 |
| 8:【対人AA】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら(できたのは)、それは私の性格がいいからです。 | .225 | .254 | .256 | .618 | .086 | .570 |
| 5:【対人AA】私がもし友達に好かれたとしたら、それは私が思いやりのある性格だからです。 | .307 | .165 | .097 | .547 | .304 | .523 |
| 4:【対人C】私は、友達に好きになってもらいたいと思ったら、いつでも好きになってもらえます。 | .280 | .272 | .227 | .389 | .119 | .369 |
| 12:【対人AE】私は新しい友達と仲よくなれるように、努力することができます。 | .354 | .035 | -.037 | .045 | .644 | .545 |
| 11:【対人AE】みんなで係活動をするとき、私はいろいろ努力して友達と協力することができます。 | .339 | .016 | .042 | .006 | .510 | .377 |
| 9:【対人AE】もし私が友達に好かれたとしたら(好かれているのは)それはそうなるように努力したからです。 | .105 | .119 | .098 | .323 | .478 | .368 |
| 10:【対人AE】もし私にたくさん友達ができたとしたら、それはそのための努力をしたからです。 | .146 | .137 | .073 | .333 | .460 | .368 |
| 固有値 | 2.37 | 2.31 | 1.87 | 1.85 | 1.59 | 9.981 |
| 分散の % | 11.83 | 11.55 | 9.33 | 9.25 | 7.95 | |
| 累積 % | 11.83 | 23.38 | 32.71 | 41.96 | 49.90 | |

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

注）因子負荷量は、絶対値が0.40以上のものを採用した。

Table 3の結果から，全分散の49.90％で5因子が説明されていることがわかる。

第1因子は，固有値2.37（11.83％）の因子であり，「1:【対人C】私は，その気になればたくさんの友達をつくれます。」，「2:【対人C】私は，その気になれば新しい友達とすぐ仲よくすることができます。」，「6:【対人 AA】私は新しい友達とすぐ仲よくなれる性格です。」，「3:【対人C】私は，たくさんの友達といっしょにうまく係活動をしようと思ったらそうすることができます。」の4項目に高い負荷を示している。その気になれば，友達とうまくやっていけるだろうという「達成への統制感」の因子であるといえる。

第2因子は，固有値2.31（11.55％）の因子である。この因子に負荷するのは「18:【対人AP】もし私に友達がたくさんできたとしたら（できたのは），それは先生のおかげです。」，「19:【対人AP】私が友達に好かれたとしたら，それは先生のおかげです。」，「20:【対人 AP】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら（できたのは），それは先生のおかげです。」，「17:【対人 AP】もし私が新しい友達と仲よくなれたとしたら（なれたのは）それは先生のおかげです。」の4項目である。つまり，「先生の援助があれば，友達とうまくやっていける」という「教師の援助の保有感」の因子である。

第3因子は，固有値1.87（9.33％）の因子である。「15:【対人 AL】私にたくさん友達ができたとしたら，それは運がいいからです。」，「16:【対人AL】私が新しい友達と仲よくなれたとしたら(なれたのは)，それはたまたま運がよかったからです。」，「14:【対人 AL】私が友達に好かれたとしたら（好かれているのは），それはもともと運がいいからです。」，「13:【対人 AL】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら（できたのは），それは運がいいからです。」の4項目が高い負荷を示している。運によって，対人関係が左右されるという「運の保有感」の因子である。

第4因子は，固有値1.85（9.25％）の因子である。「7:【対人 AA】私にたくさん友達ができたとしたら（できたのは），それは私の性格がいいからです。」，「8:【対人 AA】私がみんなといっしょにうまく係活動ができるとしたら（できたのは），それは私の性格がいいからです。」，「5:【対人A A】私がもし友達に好かれたとしたら，それは私が思いやりのある性格だからです。」の3項目が高い負荷を示している。自分の性格がよいから対人関係がうまくいくという「良い性格の保有感」の因子である。

第5因子は，固有値1.59（7.95％）の因子である。「12:【対人 AE】私は新しい友達と仲よくなれるように，努力することができます。」，「11:【対人 AE】みんなで係活動をするとき，私はいろいろ努力して友達と協力することができます。」，「9:【対人 AE】もし私が友達に好かれたとしたら（好かれているのは）それはそうなるように努力したからです。」，「10:【対人 AE】もし私にたくさん友達ができたとしたら，それはそのための努力をしたからです。」の4項目が高い負荷を示している。努力をしたから対人関係がうまくいくという「努力の保有感」の因子である。

全体的にみて，「達成への統制感」が第1因子にきたことで，「その気になればうまくできる」と考えに最も左右され，第5因子に「努力の保有感」がきていることから，努力して，頑張って対人関係をうまくやっていこうというふうには考えにくく，いざとなったら「先生」を頼ればよい，「運」「性格」でなんとかなるという考えに左右されやすい。また，対人関係の「努力」は，行動として表しにくいともいえる。

### 1.3. .進路 CAMI の因子分析

Table.4は，進路 CAMI の20項目を因子分析し，固有値1以上でバリマックス回転をした結果である。

Table 4の結果から，全分散の44.44％で4因子が説明されていることがわかる。

第1因子は，固有値2.98（17.52％）の因子であり，「2:【進路C】私は将来，おそらく希望する職業に就けると思います。」，「16:【進路 AL】将来，私は運が開けて希望通りの社会生活（人生）を送れるようになると思います。」，「4:【進路C】私は，将来自分の予想通りの社会生活（人生）を送ることができると思います。」，「8:【進路 AA】将来，希望通りの社会生活（人生）を送っていける能力や資質が，私にはあると思います。」

「15:【進路 AL】私は将来運良く，希望通りの職業に就けると思います。」「1:【進路C】私は自分のだいたい希望する大学に進学することができると思います。」の６項目に高い負荷を示している。希望する進路実現への統制感と，就職への運と能力が一つにまとまっている。「達成への統制感，運（就職）・能力の保有感」の因子であるといえる。

第２因子は，固有値2.02（11.90％）の因子であり，「19:【進路 AP】私が，将来希望通り就職できたとしたら，それはいろいろ良きアドバイスをしてくれる人がいるからです。」，「18:【進路AP】私が希望の大学へ進学できたとしたら，それは周りの人々のよきアドバイスがあるからだと思います。」，「12:【進路 AE】将来，希望通りの社会生活（人生）を送るためには，何が大事なことかいろいろ考えています。」，「17:【進路 AP】勉強ができるように，私にはいろいろと助言してくれたり，励ましてくれる人がいます。」の４項目に高い負荷を示している。他者の援助，アドバ

Table 4　進路 CAMI の因子分析結果（バリマックス回転後の因子負荷量）

| | 因子1 達成への統制感、運（就職）・能力の保有感 | 因子2 他者の援助の保有感 | 因子3 努力の保有感 | 因子4 運の保有感 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|---|
| 2:【進路C】私は将来、おそらく希望する職業に就けると思います。 | .707 | .182 | .238 | -.026 | .591 |
| 16:【進路AL】将来、私は運が開けて希望通りの社会生活(人生)を送れるようになると思います。 | .660 | .181 | .116 | .179 | .514 |
| 4:【進路C】私は、将来自分の予想通りの社会生活(人生)を送ることができると思います。 | .636 | .174 | .176 | .067 | .470 |
| 8:【進路AA】将来、希望通りの社会生活(人生)を送っていける能力や資質が、私にはあると思います。 | .634 | .149 | .208 | .043 | .470 |
| 15:【進路AL】私は将来運良く、希望通りの職業に就けると思います。 | .616 | .123 | .182 | .239 | .485 |
| 1:【進路C】私は自分のだいたい希望する大学に進学することができると思います。 | .568 | .107 | .379 | .042 | .480 |
| 19:【進路AP】私が、将来希望通り就職できたとしたら、それはいろいろ良きアドバイスをしてくれる人がいるからです。 | .106 | .775 | .092 | -.005 | .620 |
| 18:【進路AP】私が希望の大学へ進学できたとしたら、それは周りの人々のよきアドバイスがあるからだと思います。 | .064 | .652 | .144 | .067 | .454 |
| 12:【進路AE】将来、希望通りの社会生活(人生)を送るためには、何が大事なことかいろいろ考えています。 | .191 | .499 | .309 | .000 | .381 |
| 17:【進路AP】勉強ができるように、私にはいろいろと助言してくれたり、励ましてくれる人がいます。 | .295 | .479 | .168 | -.061 | .349 |
| 20:【進路AP】将来、私が希望通りの社会生活ができるように、周りの人がいろいろ協力し、支えてくれると思います。 | .353 | .370 | .103 | .002 | .272 |
| 11:【進路AE】私は将来の希望する職業のことを、いろいろ自分で調べたり、人に聞いたりしています。 | .224 | .309 | .239 | -.109 | .214 |
| 10:【進路AE】私は希望する大学へ進学するために、一生懸命努力して勉強しています。 | .212 | .273 | .649 | -.002 | .541 |
| 3:【進路C】私は、自分の進学に必要なレベルまで成績を良くしていると思います。 | .287 | .210 | .572 | .128 | .470 |
| 9:【進路AE】私は成績を良くするために、計画をたてて勉強しています。 | .261 | .143 | .428 | .009 | .272 |
| 13:【進路AL】もし私がいつもより良い成績がとれたなら(とれたのは)、それは運が良かったからです。 | .143 | -.038 | .143 | .732 | .578 |
| 14:【進路AL】もし私が希望通りの大学へ進学できたとしたら、それは運がいいからだと思います。 | .068 | .005 | -.063 | .622 | .395 |
| 固有値 | 2.98 | 2.02 | 1.50 | 1.06 | 7.56 |
| 分散の％ | 17.52 | 11.90 | 8.81 | 6.22 | |
| 累積％ | 17.52 | 29.42 | 38.23 | 44.44 | |

因子抽出法：主因子法　　回転法：Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

注）因子負荷量は、絶対値が0.40以上のものを採用した。

イスによって希望する進路が実現できるという「他者の援助の保有感」の因子であるといえる。

第3因子は，固有値1.50（8.81%）の因子であり，「10:【進路AE】私は希望する大学へ進学するために，一生懸命努力して勉強しています。」，「3:【進路C】私は，自分の進学に必要なレベルまで成績を良くしていると思います。」，「9:【進路AE】私は成績を良くするために，計画をたてて勉強しています。」の3項目に高い負荷を示している。希望進路の中でも進学に関して，努力をすれば，希望の進路に進めるだろうという「努力の保有感」の因子であるといえる。

第4因子は，固有値1.06（6.22%）の因子であり，「13:【進路AL】もし私がいつもより良い成績がとれたなら（とれたのは），それは運が良かったからです。」，「14:【進路AL】もし私が希望通りの大学へ進学できたとしたら，それは運がいいからだと思います。」の2項目に高い負荷を示している。運が良ければ，希望の進路に進めるだろうという「運の保有感」の因子であるといえる。

全体的に見ると，第1因子に運，能力と達成への統制感が集まっていることから，希望進路の実現に関して，達成できるだろうという統制感は，運や能力によって支えられていると考えられる。次に他者の援助の保有感，その次に努力の保有感である。運や能力に左右されやすく，その次には人に頼るという考えに左右され，「自分の努力」でとは考えにくいといえる。

### 2.1．学習CAMI（因子得点のデモ要因による分析）

学習CAMIで，説明される分散の%が10%を超えたのは，「学:因子1:運・能力の保有感」(14.82%)と「学:因子2:努力の保有感」(10.97%)の2因子のみであった。この2因子の因子得点の，デモ要因による平均値の比較を行った結果，有意であったものだけを記述する。

1）まず，学習CAMIの因子1「運・能力の保有感」だが，学習における成功の可否を運や能力で説明する傾向が，男子の方が強い。

読書の有無では「全くしない」と「2時間以上」を除けば，，読書時間が短いほど，運や能力に原因帰属する傾向があるといえる。

2）就職を希望する生徒は全体のわずか2%程だが，飛び抜けて高く，普通科高校への進学を希望している生徒はマイナスの数値になっている。

次に，学習CAMIの因子2「努力の保有感」だが，学習の成功の可否を，努力で説明しようとする生徒は，学年が上がるにつれて低くなっている。かといって，因子1の「運・能力の保有感」や，因子4の「教師の援助の保有感」では有意差がない。受験を目の前にした時期に，「がんばればいい点がとれる」と思うかと聞かれても，『今さら・・・』という気持ちだったのではないだろうか。

3）部活では「運動部」「文化部」両方に参加している生徒は，「頑張れば結果がついてくる」という意識が最も強い。「運動部だけ」と「両方とも参加していない」に5%水準で有意差がある。運動部では，スポーツを通して「行動を起こす」ことによって何かしら「結果」が出て，それがフィードバックされやすいという繰り返しが，「努力の保有感」につながっていると考えられる。

4）家庭での学習時間が長いほど，学習における「努力の保有感」は強くなっている。「30分より少ない」と「1時間以上2時間以内」の間に5%水準で有意差があることから，「努力の保有感」につながる家庭学習時間は，「1時間以上」は必要ではないかと予測できる。

5）「将来の夢を持っている」と，はっきり答えられる生徒のみ，平均値がプラスになっている。「自分はこうなりたい」「自分はこれを目指したい」という気持ちが，「努力の保有感」とつながっている。

6）「就職」を目指す生徒の「努力の保有感」が極端に低い。学習面における「あきらめ」との関連と予測できる。

### 2.2．対人関係CAMI（因子得点のデモ要因による分析）

対人関係CAMIで，説明される分散の%が10%を超えたのは，「対:因子1:達成への統制感」(11.83%)と「対:因子2:教師の援助の保有感」(11.55%)の2因子のみであった。この2因子の因子得点の，デモ要因による平均値の比較を行った結果，有意であったものだけを記述する。

まず，対人関係CAMIの因子１「達成への統制感」だが，これは，対人関係のうち，特に友人との関係において，「うまくやっていける」とどの程度考えているかを示したものである。「都市部」の数値が高いのは，「農村部」より人数の多い社会で生活しているために，友人とのやりとりの回数，経験などが多いためであろう。「農村部」では，小学校時代に１クラスしかなく，クラス替えを経験していない生徒さえいると思われる。「都市部」では単純により多くの人間とのふれあいの経験が生かされていると思われる。

１）２学年が極端に低い。２学年のころは第二反抗期の真っ直中で，１学年よりも学校生活になれ，１学年のように甘えられず，部活動では３学年が引退するため，中心的存在となっていく。その中で，「自立」するための様々な葛藤があり，友人との意見の衝突なども起こりやすい状況なのだろう。

２）家庭でのテレビ視聴時間などの約束がある生徒は，約束をする，約束を守るという経験が豊富なため，わがままを抑えて他人にあわせることができるのであろう。

３）将来の夢を持っているという生徒のみ，因子得点の平均がプラスの値をとっている。将来の夢を持っていることは，高いところに自分をおくことができ，友人関係などわけないと思わせてくれるのかも知れない。

３）県外でも就職してやっていけるという裏付けになっているのではないだろうか。友人関係でなんとかやっていけるという気持ちがないと，県外へ飛び出したとき，新たな友人が作れるかどうか不安だろうし，不安なために，県外へ出ようとは思えないだろう。

次に，対人関係（友人）CAMIの因子２「教師の援助の保有感」の因子得点をデモグラフィック要因で平均値の比較をした結果，有意差が出たものだけをグラフ化し，考察する。

４）「先生のおかげで友人とうまくやれる」と考える生徒は，１学年に多い。学年が上がるにつれて，低くなっている。１学年では，異なる小学校からの入学などもあり，担任の先生のいろいろなアプローチを感じているだろうが，３年生にもなれば，自立も促され，友人関係が先生のおかげとは考えないのだろう。

５）男子の方が，友人関係における教師の援助を感じている。

６）父親が沖縄県外出身という生徒は全体の約７％しかいないが，５％水準で有意差が出た。学習CAMIの因子３「達成への統制感」でも５％水準で有意差があり，父が県外出身の方が達成への統制感が高い。子どもを自立させようとするアプローチが盛んなのだろうか，先生のおかげではなく，自分でやるんだという気概が感じられる。

７）家庭でテレビの視聴時間などの約束事を決めている家庭ほど，友人関係における教師の援助を感じている。従順な生徒ということだろうか，家庭で約束事をしている生徒は，「先生のおかげ」と，感謝の念を抱くことのできる生徒と思われる。

８）将来の夢を持っている生徒ほど，友人関係の教師の保有感が高くなっている。教師の援助を感じている生徒ほど，将来の夢を持ちやすいということがいえる。

将来の夢を持っているほど，教師の保有感が高かったわけだが，上の結果は，就職希望の生徒が教師の援助の保有感が高くなっており，意外な結果となった。教師の援助の保有感は両極端ということだろうか。一方では，自立した上での教師の援助の保有感で，自分でも何とかやっていけるのだが「助けてもらっていてありがたい」という気持ち，もう一方では，自立していない状況での教師の援助の保有感で，「いつでも先生に頼りたい」という依存の対象になっている場合である。

### ２.３．進路CAMI（因子得点のデモ要因による分析）

進路CAMIで，説明される分散の％が10％を超えたのは，「進:因子１:達成への統制感,運（就職）・能力の保有感」（17.52％）と「進:因子２:他者の援助の保有感」（11.90％）の２因子のみであった。この２因子の因子得点の，デモ要因による平均値の比較を行った結果，有意であったものだけを記述する。

１）まず，進路CAMIの因子１「達成への統制感，運・能力の保有感」だが，男子の方が女子よりも高くなっている。男子のほうは楽観的で，進路に関して何とかなると考えている生徒が多い

ようだ。

2）文化部の生徒は，進路に関して不安を抱いているのだろうか，運動部に比べて，よりシビアに自分の進路を見つめている様子が想像できる。

3）読書時間が長いほど，因子得点が低い傾向にあるということは，読書を通じて幅広い世界を知ることで，現実の厳しさなどを感じているためかも知れない。

4）約束事をしている生徒ほど因子得点が高いという結果である。約束事をきちんとしているから，学習時間の確保につながり，それが，進路実現の自信へとつながっているのであろう。

5）将来の夢を持っているものだけがプラスになっている。目指すものを持っていなければ，目標がない状態なので，達成への統制感がないのは自明だろう。目指すものがあるということ自体，とても大切なことと改めて感じた。

6）県外へ就職してみたいと思っている生徒のみがプラスになっている。「県外に飛び出したい」という気概があるということは，それだけ志が高く，「やればできる」と思っているからこそのことだろう。

次に，進路CAMIの因子2「他者の援助の保有感」の因子得点をデモグラフィック要因で平均値の比較をした結果，有意差が出たものだけをグラフ化し，考察する。

7）希望進路実現のために，アドバイスをくれたり，サポートしたりしてくれる人が身近にいて，援助を感じているかどうかが，この因子得点にあらわれる。

8）都市部の方が農村部より高いのは，単純に人が多いので，いろんな人とのつながり，いろんな人から受ける刺激なども農村部よりは強いためだと思われる。

9）1学年と2学年に有意差がある。これだけ差があるのは，1学年のときはまわりからあれこれ言われることが多く感じるのだろうが，2学年あたりから，アドバイスのやり方が，直接的な内容でなく，「あなたの考えはどうなのか」と，考えさせるようなアドバイスに変わるような感じがする。要するに明確な指示ではなく，責任を持たせようとする，その影響だろうか。

10）進路における他者の援助は，女子の方がより感じているようだ。この結果は，学習CAMI因子4の教師の援助の保有感や，対人関係CAMI因子2の教師の援助の保有感の結果と逆になっている。つまり，進路の場合のみ，女子の方が高くなっているということである。

11）質問の項目が進路のみ「他者」であり，学習と対人関係は「先生」である。「先生」の援助は男子の方が高く感じているが，広く「他者」というと女子が高い。このことは，男子の社会の狭さを示しているかも知れない。

12）部活動で両方に参加している生徒の平均値が高くなっている。人より大変な思いをしている分，まわりからの支えに感謝もできるのだろう。

13）勉強時間が長いほど，他者の援助を感じているといえる。他者の援助を感じているからこそ，長い時間，勉強に取り組めるのかもしれない。

14）家庭でテレビの視聴時間などのルールを家の人と決めているかという質問では，「約束している」生徒が最も平均値が高く，進路における他者の援助を感じているといえる。おそらく，この「約束」さえも，束縛されるものという考えよりも，自分の進路実現に対する援助と感じられるのだろう。

15）先ほどの因子1と同様に，将来の夢を持っている生徒のみ平均値がプラスである。目標が定まっていなければ，他人からのアドバイスをアドバイスと感じることができずに，注意や指導と受けとってしまうところがあるだろう。そのため，将来の夢を持っていること自体がとても大切に思える。

16）卒業後の希望進路においては，専門学校への進学希望者の因子得点が最も高い。実業高校を目指す生徒は最も低くなっている。この結果は，他者の援助が感じられる生徒ほど，より専門的な専門学校や，普通科高校へ進学を希望し，他者の援助を感じられない生徒ほど，実業高校や就職を選ぶ傾向にあるということも示している。

17）県外への就職を希望している生徒ほど，進路における他者の援助の保有感が高い。他者の援助を感じているからこそ，知人の少ない「県外」へ飛び出しても，何とかやっていけそうと思えるのだろう。

ここまでをまとめると，デモグラフィック要因

13項目の中で，各因子得点の平均値に有意差があると出た項目が多かったのは，一番に「男女」と「将来の夢の有無」で11項目，三番目に「卒業後の希望進路」で10項目，次に「約束事」で８項目と続いた。

このことからいえることは，学習や進路，友人関係の成功の可否をどのように説明するか，自分はやれるとどの程度思えるかというのは，性別や将来の夢，希望進路先，約束事とお互いに関係が深いということである。

性別による差の原因は，子どもたちの住む社会のあり方などによるところが大きく，原因を突き止めるのはここでは難しいが，この地域の特徴というものが垣間見えた。先行研究と同様に，男子が「やればできる」といったとき，その裏付けが運や能力であることが多いことを示している。沖縄の方言でいう「なんくるないさ」の誤った解釈である。本来は，「努力して行動を起こしていけば，あとはなるようになる」という意味だが，男子の場合は，「そのときがくれば，運や勘，持っている能力でなんとかなるだろう」という運まかせの「なんくるないさ」になっている。

Table 5　学習・対人関係・進路の３ CAMI 因子得点の２次的因子分析結果

| | 因子1「運の保有感」 | 因子2「達成への統制感」と「能力の保有感」 | 因子3「努力の保有感」と「他者の援助の保有感」 | 共通性 |
|---|---|---|---|---|
| 進:因子4:運の保有感 | .838 | -.069 | -.008 | .707 |
| 学:因子1:運・能力の保有感 | .710 | .497 | -.037 | .752 |
| 対:因子3:運の保有感 | .686 | .146 | -.088 | .499 |
| 対:因子2:教師の援助の保有感 | .331 | .164 | .102 | .147 |
| 進:因子1:達成への統制感、運（就職）・能力の保有感 | .152 | .699 | .118 | .526 |
| 学:因子3:達成への統制感 | .045 | .604 | .156 | .392 |
| 対:因子4:良い性格の保有感 | .181 | .487 | .093 | .279 |
| 進:因子3:努力の保有感 | .118 | .399 | .256 | .238 |
| 対:因子1:達成への統制感 | .034 | .343 | .258 | .185 |
| 進:因子2:他者の援助の保有感 | -.001 | .032 | .772 | .597 |
| 対:因子5:努力の保有感 | -.018 | .193 | .626 | .430 |
| 学:因子2:努力の保有感 | -.120 | .177 | .543 | .340 |
| 学:因子4:教師の援助の保有感 | .179 | .201 | .413 | .243 |
| 固有値 | 1.91 | 1.78 | 1.65 | 5.335 |
| 分散の% | 14.66 | 13.68 | 12.71 | |
| 累積% | 14.66 | 28.33 | 41.04 | |

因子抽出法：主因子法　回転法：Kaiser の正規化を伴わないﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

注）因子負荷量は、絶対値が0．40以上のものを採用した。

将来の夢があること，希望進路先が見えていることが，ここまで差を生むものだとは思っていなかった。改めて，進路指導，キャリア教育の重要性を感じることができた。

家庭でのテレビ視聴時間などの約束事があるかどうかも，大きな影響を与えているようだ。約束事をしている生徒自体，919人中73人で，約８％しかいない（「どちらかといえばしている」を含めると約23％）のだが，因子得点の平均値は好ましい方向に概ね高い結果が出ている。約束をしているということは，していない家庭よりも，保護者の教育的意識が高く，基本的生活習慣の確立への意識が高いといえる。この生活習慣への保護者の意識が，子どもたちの達成への統制感，手段の保有感に大きな影響を与えていることが示された。

### 2.1　2次的因子分析（CAMI-Total）

Table 5は，学習CAMIの因子得点４項目，対人関係CAMIの因子得点の５項目，進路CAMIの４項目の計13項目を２次的に因子分析し，固有値１以上でバリマックス回転をした結果である。

第１因子は，固有値1.91（14.66％）の因子であり，「進:因子４:運の保有感」「学:因子１:運・能力の保有感」「対:因子３:運の保有感」の３項目に高い負荷を示している。３つのCAMIの「運の保有感」が見事に集まっているので，「運の保有感」の因子であるといえる。

第２因子は，固有値1.78（13.68％）の因子であり，「進:因子１:達成への統制感，運（就職）・能力の保有感」「学:因子３:達成への統制感」「対:因子４:良い性格の保有感」の３項目に加え，第１因子でも高い負荷を示した「学:因子１:運・能力の保有感」が再度第２因子でも高い負荷を示している。「達成への統制感と能力の保有感」の因子であるといえる。

第３因子は，固有値1.65（12.71％）の因子であり，「進:因子２:他者の援助の保有感」「対:因子５:努力の保有感」「学:因子２:努力の保有感」「学:因子４:教師の援助の保有感」の４項目に高い負荷を示している。「努力の保有感と他者の援助の保有感」の因子であるといえる。

全体的にみて，「運」は独立してまとまり，「達成への統制感」は「能力」とまとまり，「努力」は「他者の援助」とまとまった。このことより，学習，対人関係，進路，いずれの場面においても，根底には第一に「運」，次に「能力」，次に「努力」や「他者の援助」が影響しており，達成できるという自信は，主に「能力」とつながっており，『頑張って行動したからできる』というよりも，『能力があるからできる』というように，原因帰属しやすいことがわかる。

### 4.2．CAMI-Totalとベネッセ生きる力（自己評価）との関連性

「生きる力」自己評価の40項目を，まず８つの中領域で，各平均をとり，さらに，４領域にまとめて，平均値を算出した。

まずは，この平均値を「学校所在地」「性別」「学年別」で比較してみる。その結果が，以下のTable 6～8である。

このように，「学校所在地」「学年」による有意な差はないという結果になった。このことは，この尺度で測ることのできる「生きる力」に関しては，「学校の所在地」や，「学年」にはよらないということを示している。「性別」のみ，「能力・スキル」と「社会への適応力」に５％水準で有意な差が見られた。わずかだけ男子が高くなっている。

次に，先に述べたように，CAMIの各因子得点の平均値で差を生んでいたデモ要因の「将来の

Table 6　生きる力４領域平均値の学校所在地による比較（t検定）

| | 都市部or農村部 | N | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力１「能力・スキル」 | 都市部 | 386 | 2.2054 | .63908 | n.s. |
| | 農村部 | 210 | 2.1036 | .65084 | |
| 生きる力２「社会への適応力」 | 都市部 | 386 | 2.2200 | .65377 | n.s. |
| | 農村部 | 210 | 2.1336 | .65902 | |
| 生きる力３「態度・価値観」 | 都市部 | 385 | 2.2998 | .63808 | n.s. |
| | 農村部 | 210 | 2.2483 | .67063 | |
| 生きる力４「自己成長力」 | 都市部 | 384 | 2.3019 | .68621 | n.s. |
| | 農村部 | 210 | 2.1647 | .67240 | |

Table 7　生きる力４領域平均値の学年別による比較（ｔ検定）

| | 学　年 | N | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力１「能力・スキル」 | １学年 | 288 | 2.1972 | .65107 | n.s. |
| | ３学年 | 308 | 2.1437 | .63836 | |
| 生きる力２「社会への適応力」 | １学年 | 288 | 2.1686 | .66713 | n.s. |
| | ３学年 | 308 | 2.2091 | .64662 | |
| 生きる力３「態度・価値観」 | １学年 | 288 | 2.2921 | .65005 | n.s. |
| | ３学年 | 307 | 2.2718 | .65019 | |
| 生きる力４「自己成長力」 | １学年 | 287 | 2.2785 | .69457 | n.s. |
| | ３学年 | 307 | 2.2299 | .67415 | |

Table 8　生きる力４領域平均値の性別による比較（ｔ検定）

| | 性　別 | N | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力１「能力・スキル」 | 男 | 329 | 2.2029 | .68072 | n.s. |
| | 女 | 264 | 2.1356 | .59314 | |
| 生きる力２「社会への適応力」 | 男 | 329 | 2.2402 | .68915 | n.s. |
| | 女 | 264 | 2.1328 | .60818 | |
| 生きる力３「態度・価値観」 | 男 | 328 | 2.2598 | .67255 | n.s. |
| | 女 | 264 | 2.3106 | .62082 | |
| 生きる力４「自己成長力」 | 男 | 328 | 2.2688 | .69461 | n.s. |
| | 女 | 263 | 2.2475 | .66363 | |

夢」「卒業後の進路」「約束事」においても，平均値の比較をしてみる。

Table ９は「将来の夢の有無」について，生きる力４領域の得点の平均値を比較したものである。４領域すべてに.１％水準で有意差が認められた。「将来の夢を持っている」と答えた生徒の平均値が最も高くなっている。しかも群を抜いている。「将来の夢を持っている」ときちんといいきれる生徒は，生きる力も高いといえる。CAMI同様の結果になった。

Table 10は「卒業後の希望進路」について，生きる力４領域の得点の平均値を比較したものである。これは，CAMIと異なり，１つも有意差があらわれなかった。「どこに進むか」では差が出ず，「夢を持っているかどうか」で差が出るというところが興味深い。

Table 11は「生きる力」の４領域を「約束の有無」で比較したものである。すべての領域において，「約束をしている」生徒の平均値が最も高くなっており，.１％水準で有意となった。「約束している」と答えた生徒は，全体の８％ほどしかいないが，自分の「生きる力」に肯定的な評価をしている。「約束して守る」ことは，自分を「律する」という意味で努力しており，生活習慣も安

Table 9　生きる力４領域平均値の「将来の夢」による比較（Ｆ検定）

| | | 度　数 | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力１「能力・スキル」 | 持っている | 312 | 2.3700 | .62892 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、持っている | 165 | 1.9511 | .57730 | |
| | どちらかといえば、持っていない | 82 | 1.9650 | .57404 | |
| | 持っていない | 36 | 1.8640 | .63250 | |
| | 合　計 | 595 | 2.1674 | .64296 | |
| 生きる力２「社会への適応力」 | 持っている | 312 | 2.3669 | .64675 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、持っている | 165 | 2.0119 | .56265 | |
| | どちらかといえば、持っていない | 82 | 1.9794 | .63343 | |
| | 持っていない | 36 | 1.9136 | .73948 | |
| | 合　計 | 595 | 2.1876 | .65525 | |
| 生きる力３「態度・価値観」 | 持っている | 311 | 2.4807 | .64851 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、持っている | 165 | 2.0978 | .54778 | |
| | どちらかといえば、持っていない | 82 | 2.0337 | .59755 | |
| | 持っていない | 36 | 1.9222 | .57659 | |
| | 合　計 | 594 | 2.2787 | .64636 | |
| 生きる力４「自己成長力」 | 持っている | 310 | 2.6073 | .57186 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、持っている | 165 | 1.9621 | .52628 | |
| | どちらかといえば、持っていない | 82 | 1.7429 | .59766 | |
| | 持っていない | 36 | 1.7037 | .69535 | |
| | 合　計 | 593 | 2.2534 | .68452 | |

Table 10　生きる力4領域平均値の「卒業後の進路」による比較（F検定）

| | | 度　数 | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力1「能力・スキル」 | 就　職 | 11 | 1.9907 | .50859 | n.s. |
| | 普通科高校 | 345 | 2.1940 | .63040 | |
| | 実業高校 | 207 | 2.1260 | .67081 | |
| | 専門学校 | 27 | 2.1662 | .65402 | |
| | 合　計 | 590 | 2.1651 | .64370 | |
| 生きる力2「社会への適応力」 | 就　職 | 11 | 2.0101 | .58890 | n.s. |
| | 普通科高校 | 345 | 2.2303 | .66360 | |
| | 実業高校 | 207 | 2.1244 | .64455 | |
| | 専門学校 | 27 | 2.1888 | .65809 | |
| | 合　計 | 590 | 2.1872 | .65617 | |
| 生きる力3「態度・価値観」 | 就　職 | 11 | 2.3818 | .44806 | n.s. |
| | 普通科高校 | 345 | 2.3051 | .64506 | |
| | 実業高校 | 206 | 2.2290 | .67418 | |
| | 専門学校 | 27 | 2.2935 | .62587 | |
| | 合　計 | 589 | 2.2794 | .65124 | |
| 生きる力4「自己成長力」 | 就　職 | 11 | 2.6288 | .55323 | n.s. |
| | 普通科高校 | 343 | 2.2641 | .70059 | |
| | 実業高校 | 207 | 2.1916 | .67043 | |
| | 専門学校 | 27 | 2.4074 | .60285 | |
| | 合　計 | 588 | 2.2520 | .68568 | |

Table 11　生きる力4領域平均値の「約束事」による比較（F検定）

| | | 度　数 | 平均値 | 標準偏差 | 確　率 |
|---|---|---|---|---|---|
| 生きる力1「能力・スキル」 | している | 47 | 2.4699 | .67389 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、している | 88 | 2.3210 | .60409 | |
| | あまりしていない | 198 | 2.1677 | .62829 | |
| | 全くしていない | 262 | 2.0613 | .63678 | |
| | 合　計 | 595 | 2.1674 | .64296 | |
| 生きる力2「社会への適応力」 | している | 47 | 2.5488 | .69364 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、している | 88 | 2.3647 | .59641 | |
| | あまりしていない | 198 | 2.1906 | .65008 | |
| | 全くしていない | 262 | 2.0611 | .63613 | |
| | 合　計 | 595 | 2.1876 | .65525 | |
| 生きる力3「態度・価値観」 | している | 47 | 2.6457 | .68976 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、している | 88 | 2.3866 | .57461 | |
| | あまりしていない | 198 | 2.3016 | .61275 | |
| | 全くしていない | 261 | 2.1589 | .65620 | |
| | 合　計 | 594 | 2.2787 | .64636 | |
| 生きる力4「自己成長力」 | している | 47 | 2.5567 | .80083 | ＊＊＊ |
| | どちらかといえば、している | 88 | 2.4233 | .65290 | |
| | あまりしていない | 198 | 2.2437 | .63353 | |
| | 全くしていない | 260 | 2.1484 | .68630 | |
| | 合　計 | 593 | 2.2534 | .68452 | |

Table 12　2次的因子分析結果からの因子得点と生きる力4領域の平均値との相関関係

相関係数

| | | 生きる力1「能力・スキル」 | 生きる力2「社会への適応力」 | 生きる力3「態度・価値観」 | 生きる力4「事故成長力」 |
|---|---|---|---|---|---|
| CAMI_total_1VM「運の保有感」 | Pearson の相関係数 | 121** | .116** | .065 | .057 |
| | 有意確率（両側） | .003 | .005 | .112 | .168 |
| | N | 596 | 596 | 595 | 594 |
| CAMI_total_2VM「達成への統制感」と「能力の保有感」 | Pearson の相関係数 | .567** | .497** | .446** | .520** |
| | 有意確率（両側） | .000 | .000 | .000 | .000 |
| | N | 596 | 596 | 595 | 594 |
| CAMI_total_3VM「努力の保有感」と「他者の援助の保有感」 | Pearson の相関係数 | .498** | .469** | .548** | .475** |
| | 有意確率（両側） | .000 | .000 | .000 | .000 |
| | N | 596 | 596 | 595 | 594 |

**. 相関係数は 1％水準で有意（両側）。

定し，学習時間もきちんと確保されることになる。こうした日々の努力の積み重ねを，自信として持つことができているのだろうと考える。

次に，この４領域「能力・スキル」「社会への適応力」「態度・価値観」「自己成長力」の平均値と，先ほどのCAMIの２次的因子分析の結果から算出した因子得点との相関関係を調べた。

Table 12がその結果で，因子１「運の保有感」の因子得点は，「生きる力」との相関がかなり弱く，因子２「達成への統制感と能力の保有感」，因子３「努力の保有感と他者の援助の保有感」は，どの領域ともかなり相関がある。その中でも目立つのが，因子２「達成への統制感と能力の保有感」と生きる力１「能力・スキル」がr=.567（p<.01），因子３「努力の保有感と他者の援助の保有感」と生きる力３「態度・価値観」がr=.548（p<.01）と，かなり相関がある。

このことから，生きる力の４領域は，「運の保有感」との関連は浅く，「達成への統制感」「能力の保有感」「努力の保有感」「他者の援助の保有感」との関連が深いことがわかる。生きる力は，CAMI尺度である程度予測できるものと考える。

### ３．CAMI-Totalと学力（２年生達成度テスト３教科合計点の偏差値）との関連性

CAMI-Totalの３因子が，学力にどのような影響を与えているのかを調べるために，以下のように重回帰分析を行った。CAMI-Totalの因子分析で算出した３つの因子得点を独立変数とし，従属変数としては，２年生の達成度テストの３教科（国語，数学，英語）の合計点数の偏差値を各学校ごとに算出したものを用いた。強制投入法で重回帰分析を行った結果が，Table 13である。決定係数は.117で低いが，.１％水準で有意である。

因子１「運の保有感」は，標準偏回帰係数（ベータ）が-.275と，負の値をとり，因子３「努力の保有感」と「他者の援助の保有感」は.233と正の値をとった。このことより，「運」の保有感は学力へマイナスの影響を与え，「努力」「他者の援助」の保有感は学力へプラスの影響を与えることが示された。因子２「達成への統制感と能力の保有感」は，有意な関連性は見られなかった。

この結果から，自分の成功や失敗の原因を「運」で説明するという考え方は，学力をマイナスの方向へ引っ張る影響力があることがわかる。やはり「運」ではなく，「努力」や「他者の援助」があるからうまくいくという考え方を持たせない限りは，学力の向上は望めないようだ。

さらに細かく調べるために，今度は，CAMI-Totalの因子分析に用いた，基の３つのCAMIの各因子得点を独立変数として，ステップワイズ法を用いて重回帰分析を行った。学力への影響を見た結果がTable 14である。

この結果から，学力へプラスの影響力があるのは，「学:因子２:努力の保有感」「学:因子３:達成への統制感」「進:因子２:他者の援助の保有感」の３因子得点で，マイナスの影響を与えているのが，「学:因子１:運・能力の保有感」「対:因子２:教師の援助の保有感」「対:因子４:良い性格の保有感」の３因子得点であった。プラスの影響を与える３因子をみると，学習場面において努力できる，やればできるという考え方や，進路のアドバ

**Table 13　学力とCAMI-Total因子得点**

従属変数: 合計点（達成度テスト）偏差値

| 独立変数 | 標準偏回帰係数 |
|---|---|
| CAMI_total_1VM　「運の保有感」 | -.275*** |
| CAMI_total_2VM　「達成への統制感」と「能力の保有感」 | -.038n.s. |
| CAMI_total_3VM　「努力の保有感」と「他者の援助の保有感」 | .233*** |

***p<.001, **p<.01, *p<.05, $R^2$=.117***

**Table 14　学力と３つのCAMI因子得点**

従属変数: 合計点（達成度テスト）偏差値

| 独立変数 | 標準偏回帰係数 |
|---|---|
| 学：因子１：運・能力の保有感 | -.218** |
| 学：因子２：努力の保有感 | .170** |
| 学：因子３：達成への統制感 | .189** |
| 対：因子２：教師の援助の保有感 | -.137* |
| 対：因子４：良い性格の保有感 | -.138* |
| 進：因子２：他者の援助の保有感 | .121* |

***p<.001, **p<.01, *p<.05, $R^2$=.175***

イスなど他者からの援助，支援を感じていることが，学力への好影響を与えているといえる。マイナスの影響を与える3因子をみると，学習場面における運まかせ，もともと能力があるという考え方や，対人関係において教師まかせの考え方や，生まれつきの性格であると思っていることが悪影響を及ぼしているといえる。

Table 13の結果と比較すると，CAMI-Totalでマイナスだった「運の保有感」でも特に学習場面における運の保有感がより大きな影響を及ぼしているといえる。また，プラスだった「努力の保有感」「他者の援助の保有感」でも，学習場面における「努力の保有感」がより大きな影響を及ぼしている。学力との関係なので，学習場面における保有感が大きな影響を与えるのは当然ともいえるが，興味深いのは，進路場面における「他者の援助」を感じているほど，学力への好影響を与えていることだ。周囲の人間が自分を支えてくれているという感謝の念も，学力向上には重要な要素といえそうだ。

## 4．研究のまとめ

まず名護市の都市部，農村部における中学生の「努力」や「行動」の役割の理解や意識を，「学習」，「対人関係」，「進路」の3つのCAMI測定尺度の因子分析を行い検討した。その結果，「学習」においては第1因子に「運・能力の保有感」がまとまり，次に「努力の保有感」が続いた。先行研究と同様に，勉強ができる，できないことの原因を「運」や「能力」という認識を土台として，成績・勉強に関する自己理解をしていると説明できる。「対人関係」では友人の関係にしぼった質問項目で，第1因子に「達成への統制感」，次に「教師の援助の保有感」が続いた。友人関係は，「その気になればうまくいく」と考えている生徒が多く，トラブルなどの際，うまく取り持ってくれるのは教師であると感じている。「努力の保有感」は第5因子であり，生徒にとって友人関係は「努力」するものという考えは薄いようだ。「進路」では第1因子に「達成への統制感」と「運・能力の保有感」がまとまり，希望進路の実現に関して，達成できるだろうという統制感は，運や能力によって支えられていると考えられる。この3つの因子分析の際に算出した因子得点を用いて，デモグラフィック要因などによる平均値の比較を行うと，有意な差が出た因子得点が多かったのが，「男女」「将来の夢の有無」「卒業後の希望進路」「テレビ視聴時間などの約束事」などによる差であった。将来への見通しを持とうとしている生徒，生活習慣を意識している生徒は，「努力の保有感」が比較的高く，目標に向かって行動できる，「生きる力」のある生徒ではないかと予測できる。

次に，これら3つのCAMIの因子得点をさらに2次的に因子分析し，「学習」「対人関係」「進路」に共通して潜んでいる因子を見つけようと試みた。その結果，第1に「運の保有感」がまとまり，第2に「達成への統制感と能力の保有感」，第3に「努力の保有感と他者の援助の保有感」がまとまった。このことから，名護市の中学生の根底には，うまくいくかどうかは「運」によって支えられており，「やればできる」という自信の根拠は「能力」があるからで，「頑張って努力したから」「他者に援助してもらっているから」という考えは比較的弱いことがわかった。

この2次的因子分析の因子得点と，「生きる力自己評価」の4領域の平均点の相関関係を見ると，「運」との相関は弱く，「達成への統制感」「能力」「努力」「他者の援助」の保有感とはかなりの相関があった。CAMI測定尺度で生きる力を予測することはできそうだ。学力への影響を重回帰分析で調べると，「運」は負の影響を，「努力」「他者の援助」は正の影響を与えていた。さらに，1次的な因子分析の各因子得点で重回帰分析をすると，学習における「努力」，「達成への統制感」，進路における「他者の援助」が正の影響を与え，学習における「運・能力」，対人における「教師の援助」と「能力」は，負の影響を与えていた。

まとめると，将来の夢を持ち，生活習慣への意識が高く，家庭学習時間も比較的長い生徒ほど，「努力の保有感」が高く，生きる力へも学力へも好影響を与えているが，「運の保有感」の高い生徒は，生きる力へも学力へも好影響を与えていない。いいかえると，「運」「能力」のように統制不可能な原因帰属する生徒は，結果だけ（うまくいったか，いかなかったか）を説明をしようとしており，「努力」「他者の援助」のように統制可能な原

因帰属する生徒は，過程（プロセス）説明ができる。物事を成し遂げるとき，結果でものをいうのではなく，過程（プロセス）を理解し説明できる生徒が，学力という結果を出しているといえる。

結局，３つのCAMIは，「達成への統制感」「能力の保有感」「努力の保有感」「他者の援助の保有感」で「生きる力」と最もつながっていたといえ，CAMIにて「生きる力」を予測できるといえる。しかし「生きる力」の自己評価は発達的には有意差がなかった。

【引用文献】


Bandura, A. 1977 Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84,191-215

Benesse教育研究開発センター 2002 「21世紀型学力を育む総合的な学習を創る－新しい学力を育む教育調査」第２章－1「新しい学力を育むための教育調査」 http://www.benesse.jp/berd/center/open/report/21seikigata/2002/index.html

Skinner,E.A., Chapman,M., Baltes,P.B. 1988 Control,means-ends,and agency beliefs: A new conceptualization and its measurement during childhood. Journalof Personality and Social Psychology. 54, 117-133

Skinner,E.A., 1993 Development and perceived control:A dynamic-model of action in context. In M.Gunnar&L.A, Sroufe (Eds,) Self processes and Development. *The Minesota Symposia on Child Psychology*. vol.23,167-216.

岡田尊司（2007）社会脳（人生のカギをにぎるもの）PHP新書471　PHP研究所

沖縄県企画部統計課（2007.10）100の指標からみた沖縄県のすがた http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/100/2007/100.html

沖縄県教育委員会　平成19年度　学校基本調査【卒業後の状況調査】２　高等学校 http://www.pref.okinawa.jp/toukeika/school/2007/sotugyou_2.html

島袋恒男・井上　厚・廣瀬　等（1996）沖縄県の児童・生徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究（1）琉球大学教育学部紀要48, pp.387-404

島袋恒男（2007）高校生の意志型・願望型の意味ある他者と進路発達に関する研究　琉球大学教育学部紀要70, pp.55-68

週間ダイヤモンド2007/04/14（2007.４）ニート率ランキング　ダイヤモンド社　pp.56-～57

高橋　勝（2007）生きる力　最新教育キーワード137第12版　時事通信社　pp.98-99

竹網誠一郎（1996）８.４自己効力による動機づけ　教育心理学Ⅰ－発達と学習指導の心理学　大村彰道編　東京大学出版会　pp.162-167

中央教育審議会答申（2008.１.17）「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」教師用パンフレット http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/pamphlet/20080117/001-008.pdf

廣瀬　等・島袋恒男・井上　厚（1996）沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連　琉球大学教育学部紀要49, pp.201-211

船津　衛（2000）ジョージ・H・ミード－社会的自我論の展開－　東信堂　pp.5-6

文部科学省（2004）キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書

文部科学省（2007.11）平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/07110710/001/005.pdf

やんばる夢発見プロジェクト　金融知力普及協会（平成19年11月現在） http://www.yanbaru-yume.com

琉球新報　2007年10月25日　朝刊　１面「沖縄全教科で最下位」